

## 「卒業研究 (2020 年度後期)」: 授業評価に関わる受講生への聞き取りとその結果についての考察

「卒業研究」は、どのコース・専攻に所属する学生にとってもそうであるように、(最低)4年間の学習の集大成としての卒業論文の執筆を目標として、履修する必修科目である。授業評価報告書で「卒業研究」を取り上げることは、ある意味極めて異例な事態とも受け取れるかも知れない。しかし、今年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、「卒業研究」以外の全ての担当科目を非同期型遠隔授業の形式で実施した関係で、授業評価アンケートを1つの授業の全ての受講者を対象として、かつ匿名性を担保できる形で実施することが困難であったため、この「卒業研究」を授業評価報告書において取り上げることにした。また「卒業研究」が担う上述のようなカリキュラム上の意義や位置付けを考えると、「卒業研究」およびそれに関連して行われる各種演習に関する評価および考察を行うことには、無視すべからざる意義があるようにも思われる。今回は、今年度に卒業論文を提出し、「卒業研究」の単位を取得することが確定している1名の学生を対象に行った聞き取り調査の結果について報告し、若干の考察を行う。

今年度の卒業論文指導は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため前期は対面式の演習の実施を控えていたこと、および当該学生が前期に就職活動を熱心に行っていたことにより、実質的に後期からの開始となった。演習は、担当教員の研究室で、ほぼ週に1度(火曜日14時30分から16時30分前後まで)のペースで行った。分野は英語学であり、演習の内容は、(a) 基本的文献についての講読形式の演習、(b) 特定の英語表現についてのコーパスを用いたデータ収集およびインフォーマントの用いた内省調査についての指導、(c) (b)のデータ収集および内省調査の結果についての考察と議論、(d) 卒業論文の構成、議論の展開、論文で用いる英語表現に関する指導が、主たるところであった。当該学生を対象として行った聞き取り調査も、上に述べた演習および論文指導の各側面に光を当てたものとなっている。以下は、個々の質問項目とそれについての当該学生の回答、およびそれについての担当者の若干の考察である。

1. この「卒業研究」に関しては、後学期開始以降、特別な場合(年末年始および大学入試共通テスト実施前10週間程度)を除き、週に1度のペースでゼミ/面会が行われましたが、この点についてどのように考えますか。
  - a. 回数が少なすぎる
  - b. やや回数が足りない
  - c. ちょうどよい
  - d. やや回数が多い
  - e. 回数が多すぎる

当該学生は、この問いに関して、c(「ちょうどよい」)を選択したが、それに加えて「卒業論文執筆が佳境に入る終盤に関しては、やや足りない」とも述べた。この点については、筆者も同感である。筆者が「卒業研究」以外の担当授業を全て非同期型遠隔形式で行っていたこと、および大学入試共通テスト直前2週間程度の期間が実質的に対面式授業禁止となっていたこともあり、卒論提出直前の時期にゼミ/面会の機会を増やすこと(例年はその時期にゼミ/面会を学生1人につき週2回以上行っている)が出来にくかったことは悔やまれる。

2. ゼミでは基本的な文献の講読、データ蒐集/事実調査に関する指導、データ蒐集/事実調査結果についての議論が行われましたが、これらの点についてお尋ねします。
  - 2.1. ゼミでなされた文献講読についてどのように思いますか。
    - a. 扱った文献および講読の時間が不十分である
    - b. どちらとも言えない
    - c. 扱った文献および講読の時間が十分である

当該学生は、この問いに対しb(「どちらとも言えない」)を選択したが、それに加えて、「扱った文献の数は適切と考えているが、時間が少なかったように感じた。また専門分野の辞典等を早い段階で紹介してほしい」とも述べている。実質的なゼミの開

始時期が10月となったこともあり、文献講読については、重要と考えられる箇所に限定了なものとなっており、その点が時間の少なさを感じた理由となっているものと思われる。新型コロナウイルスの感染拡大状況次第でもあるが、この点は、次年度は改善できると考えられる。専門分野の辞典等の紹介については、次年度以降受講学生の研究テーマが固まり次第適宜行っていこうと考えている。

2.2. ゼミでなされたデータ蒐集/事実調査に関する指導について、どのように思いますか。

- a. そうした指導が不十分であった
- b. どちらとも言えない
- c. そうした指導が十分であった

当該学生は、この問いに関して、b(「どちらとも言えない」)を選択した。そして、「コーパスの使用については、指導教員の指導の下、自分で工夫して用例を探すことが出来た。作例については、指導教員の指導がどこまで適切で、またそうした指導がどこまで必要かは不明な点が多いが、試行錯誤しながら、最終的にはある程度のノウハウを掴むことが出来た」と付け加えた。外国語としての英語を非英語母語話者の立場で研究するにあたっては、(a) 大規模コーパスによる用例蒐集、(b) 英語母語話者であるインフォーマントによる作例についての容認度判断が不可欠である。コーパスを用いた調査については、指導教員の助言も必要であるが、受講生が自分で工夫して用例収集を行い、使いながら使い方を覚えていくという側面が必要となる。またインフォーマントを用いた容認度調査については、調査を進めるにつれ、当初想定しなかった要因の関与が明るみに出たり、疑われたりすることも多いので、先立っての指導教員の構想や指導も必要であるが、調査開始後の試行錯誤も当然必要である。次年度以降も、必要な助言を行い、かつ過度な助言は行わずに、事実調査に協力していきたいと考えている。

2.3. ゼミでなされたデータ蒐集/事実調査の結果についての議論に関し、どのように思いますか。

- a. そうした議論が不十分であった
- b. どちらとも言えない
- c. そうした議論が十分であった

この問いに関し、当該学生はc(「そうした議論が十分であった」)を選択した。また「当初予期していた結果と異なる結果が得られた時に、色々と言ってくれたので助かった」とも述べた。1つ前の質問項目とも関連するが、次年度以降も適切な助言を指導学生に与えていくことが出来るよう、筆者自身も研究者としての努力を重ねる必要がある。

3. 卒業研究を卒業論文にまとめる作業についてお尋ねします。

3-1. 卒業論文を執筆する上での構想を練る段階、論文全体の構成を考えて行く際の指導教員の指導についてどのように感じましたか。

- a. 論文の構成についての指導が不十分であった
- b. どちらとも言えない
- c. 論文の構成についての指導が十分であった

当該学生は、この問いに関し、b(「どちらとも言えない」)とc(「論文の構成についての指導が十分であった」)の両方であると回答した。詳細を尋ねると、「論文全体の章立てや構成についての指導・助言はある程度もらえたが、英語の論文、言語学の論文を書いたことがなかったので、論文で用いる英語表現等についての予備知識が必要と感じた」とのことであった。論文で用いる英語表現についての指導は、論文全体の構成についての指導とは当然同一視すべきではないが、筆者が当該学生の英語ライティングにおける能力等を把握しないまま論文指導を行っていたことも確かであり、今後改善できる部分は改善したいと考える。

3-2. 実際に論文として執筆した文章についての指導教員の指導(文章の校正、表現面での指導等)についてどのように感じましたか。

- a. 文章についての指導が不十分であった
- b. どちらとも言えない

c. 文章についての指導が十分であった

当該学生は、この問いに関し、b(「どちらとも言えない」)を選択し、付け加えて、「議論の展開、例文の提示順等については、必要と思われる助言はもらえた。一方、英語表現の細かな点については、必要最小限にとどまっているように感じた」と述べた。実際の論文執筆の指導の際には、当該学生の指摘にもある通り、文章表現よりも、議論の展開、用例の提示順等に焦点が当たるのは当然と言えば当然である。ただし、指導学生が執筆した原稿に手を入れる際に、議論の構成、展開を修正すると同時に、文章を(英文法上、語法上の指導なしに)全面的に修正することも多い。なかなか両立させるのは難しいのであるが、今後は、議論の展開に関する指導と同時に、表現面での適切な指導をなるべく出来るように努めたい。

4. 卒業研究、ゼミ、論文執筆全般に関して、思ったことがあれば、自由に述べてください。

この質問に関しては、「後輩に対するアドバイスとして、卒業研究の準備には早めに取り掛かった方が良い」、「やはり後輩に対するアドバイスとして、外国語としての英語を研究することになるので、必要なインフォマントを確保しておくことが望ましい」、「小学校サブコース演習のような科目を中等教育コースにも設定して、卒論指導を早めに開始した方が良いのではないか」という回答があった。特に、3点目の回答に関しては、今後の本学部のカリキュラムの再考の際に検討する余地があるのではなかろうか。

**まとめ:** 今回の聞き取り調査の結果から判断する限り、今年度の筆者の卒業研究/卒業論文指導およびゼミは、調査の対象となった受講者にとって、ある程度肯定的に評価できるものであったようである。実際完成された卒業論文においては、英語の *instead of X* という表現に関し、興味深い事実観察が提示され、*instead of X* が副詞句としての性質を維持しつつも、(A *instead of* B の記号列を形成される際には)*instead of* が等位接続詞として再分析されつつあるとの興味深い分析が提案されている。この仮説は、今後一般的な統語理論・文法理論(とり

わけ文法の変化・拡張に関する理論)に大きな貢献をもたらす可能性を秘めたものであり、少なくともその限りにおいて、今年度の「卒業研究」およびそれに関連するゼミ/面会等の活動は意義のあるものであったと考えている。

**地域社会を核とした教育と研究のつながりについて:** 「卒業研究」という専門性が高く、かつ特定の研究に関する指導を行うことを念頭においたため、地域社会を扱うとして教育と研究のつながりを強く意識した授業内容は設定しなかった。

**謝辞:** 最後に、聞き取り調査にご協力いただいた「卒業研究」の1名の受講生に感謝したい。